

# JAAC だより

## 留学とグローバル化する教育の場（2）

— 大学秋学期入学制への移行を考える —

前号（2012年新年号）でコラムとして取りあげた「留学とグローバル化する教育の場」において、日本の大学が学生の成績評価方としてアメリカ式のGPT、GPA制を導入してきていることをお話ししました。少しずつではありますが、日本の大学の様々な運営システムが欧米に倣いはじめ、グローバル・スタンダード（世界標準・国際標準）を目指す姿が見えはじめています。そこで、今号では日本の大学のグローバル・スタンダード化の一環として秋（9月、10月）学期入学制導入の動きについて、皆さんと考えてみたいと思います。

日本の学校教育における入学・卒業の時期や学齢の割り方（何月何日から翌年の何年何月までに生まれた子供を同一学年とするという取り決め）が現在のように4月入学、3月卒業という形に落ち着いたのは明治19年（1886年）からでした。明治新政府が樹立した当初は、欧米に倣い9月入学だった学校も多かったのですが、新政府の会計年度が4月始まりとなったことから軍への入隊時期や士官学校への入学が4月となり、それに合わせるように当時の高等師範学校（現筑波大学）が4月入学制に移行されました。以来、日本の学校の新学期は4月となったわけです。これまで約130年に渡って実施されてきた学校教育制度は日本の社会のあり方と文化の一部となってきたことは言うまでもありません。例えば、3月の卒業の時期には梅の花、4月の入学式には桜、というようにそれぞれの節目には日本を代表する花木が代名詞代わりに使われ、しばしば俳句や短歌などの季語としても用いられています。また、「サクラチル（桜散る）」と電報を打てば、「受験に失敗した」という意味を婉曲に表現するものとして知られています。このように学校の行事や式典は日本の社会と文化に深い繋がりを持つようになりました。このような表現方法もまた日本語ならではの儚くも、美しいものですね。

その日本の文化や社会に大きな影響をもたらすと思われるある大学の動きがありました。先月（1月）17日に東京大学が5年後を目途に従来の春入学を廃止し、入学試験は現行通り春に実施するとしながらも入学時期を秋入学に全面移行する旨を学内懇談会の中間報告のまとめの中で発表したのです。この背景には、これまでも政府の審議会などで秋入学が提案されてきたことや、平成19年の教育再生会議の報告に基づき、「大学における学年の始期は学長の判断で定める」との規定が学校教育法施行規則に盛り込まれたことなどがあります。さらには、昨年（2011年）6月のグローバル人材育成推進会議の中間報告でも9月入学が提言されていたことなどが挙げられます。つまり、入学時期を9月に移行するという判断は大学が独自に決めることができ、そのことにより、欧米の大学の入学時期に合わせて学生がより留学しやすくなる環境が整えられることになるということです。現状では、ほとんどの大学が独自の留学制度を持っていますが、学生が留学を考える際に問題となるのが、留学を開始する時期と留学期間、そして、復学する時期だと言われています。さらに、留学を希望する多くの学生が直面する就職活動の問題などがあるようです。このように、留学はしたいが、大学のゼミや就職活動のことを考えると、容易に留学に踏み出すことができないというのが現状と言えましょう。既に、いくつかの大学では部分的に学生を秋に受け入れる制度を実施していますが、学部段階で全面的に9月入学に移行するというのは東京大学が初めてです。この東京大学の動きに合わせて、他の国公立、私立の大学も9月入学への全面移行を検討し始めたようです。

海外に留学することがグローバル化に対応する唯一の最善策だとは言いきれませんが、留学しないよりは、する方が望ましいということは皆さんも賛同されていることと思います。期間の長短に関わらず学生のうちに海外に出て見聞を広げ、異文化への理解力と対応力を高め、より高度な語学力を身に付けることはグローバル化が進む社会において必要不可欠なことだと言わざるを得ません。日本は今後ますますグローバル化に対応できる人材の育成と確保が必要となるでしょう。大学の秋入学制導入によって、恩恵を受けるのは日本人学生だけではありません。日本社会の少子化によって、日本の大学では外国人留学生の受け入れと獲得にも力を注いでいます。日本の大学が秋入学制を導入することによって、特に欧米の学生たちの日本への留学を容易にするものと思われます。このことによって、より国際色豊かなキャンパスを創造することもできるでしょうし、また、大学が直面している定員定数割れなどの諸問題においても何らかの打開策となりえるでしょう。しかしながら、秋学期入学への移行はこうしたメリットだけを齎すものではないはずです。そこには当然ながらデメリットやいくつかの問題点も出てくると考えられます。次号ではこうした問題点について考えてみましょう。

（次号に続く） （カリフォルニア事務局：照井）

## 変わりつつある学生の就職意識

厚生労働省がこのほど発表した平成24年3月に卒業する大学生の就職状況によると、平成23年12月1日現在の就職内定率は71.9%であり、これは前年同期比の3.1ポイント増であることがわかりました。微増ではあるにしろ、前年よりもやや回復の兆しが見えたことは喜ばしいことですね。そんななかで、学生の就職に対する意識がここ数年の間で少しずつ変化してきました。過去数年間で多少の割合の増減があるにしても、学生が就職に対する意識の上位2つは、1位が「楽しく働く」で全体の約3.5割、2位が「個人の生活と仕事の両立」で全体の約2割強を占め、この順位は変わっていません。しかし、ここ3年くらいの間に「個人の生活と仕事の両立」という意識が確実に伸びてきていることは注目に値すると思われまます。日本の社会全体のなかで、仕事だけに追われるという、仕事中心の生活からの開放、あるいは逃避願望が見てとれるようです。若者を中心にニートやフリーターと言ったことばが市民権を得たような社会のなかで、仕事をしたいのならバイトでも派遣でも、いつでもやれるという自負心と安心感からなのか、若者の間では仕事に就くという意味と意識が変わってきているようにも感じます。

また、着目すべきは「人のためになる仕事」に就きたい、という学生の意識が増加したことです。これは2010年3月に卒業した学生は全体の13%程度だったものが、今年2012年3月に卒業する学生のなかでは全体の約18%に増えているのです。考えてみれば、今年卒業する学生は昨年3月に起きた東日本大震災を経験していますし、また、その時以来続いている原子力発電所の事故や放射線量の問題などに直面しています。そこで、『人々のためになる何かをしたい』という意識が芽生えるのもごく自然です。震災後の1年を振り返ってみると、震災直後には被災地への募金活動など、学生たちのボランティア活動が盛んに行われた時期がありました。また、被災地での片付け作業や避難場所に暮らす高齢者の話し相手になったり、子供たちの遊び相手になったりと、日本全国から集まった多くのボランティア学生たちによって、被災地と避難場所に暮らす人々への様々な支援活動が行われました。このような活動が若者の意識を変えたのかどうかは分かりませんが、「人のためになる・・・」ということはどういうことなのかを若者たちは身をもって体験したような気がします。さらには、理科系の学生のなかにもまた「人のためになる仕事」を希望する割合が増えてきています。技術立国日本の地位を守るためにも、どのような分野であれ理科系の学生には大きな夢を持って頑張ってもらいたいものですね。このような数字を見ながら、今年卒業する学生の就職意識をまとめてみると、「個人の生活と仕事を両立させながら、人のためになる仕事をして、楽しく働きたい」ということになるようです。

このようなことから、学生が就職を希望する企業を選択する際の基準や志向も変わってきているようです。次号では、学生の企業選択における意識の変化についてお話していきたいと思っております。(次号に続く) (照井)

【編集後記】50年後の日本の人口は8600万人にまで減少し、そのうち4割が65歳以上の高齢者になると言う。この国の経済を支えるのは外国人になるのかな・・・? ●学生の意識は昔と比べるとずいぶん変わってきたもんだ。これだけ世の中が平和になって、暮らしやすくなったということなのか。でも、「よっしゃッ、やるぞ!!」という気持ちが薄れてきているように思うのは我々の世代だけだろうか▼まもなく東日本大震災から1年が過ぎようとしている。被災地の方々の話を聞くと、『あれから何が変わったのか?』と思わざるをえない▼インフルエンザが依然その猛威を奮っている。毎年のように死者も出ている。特に小さな子供やお年寄りには身近にいる危険な存在なのだ◆いよいよ日本の大学も秋入学制を真剣に考え始めたようだ。今までのような学校と企業や社会との関わり方も大きく変わっていくことだろう。それに伴う準備や態勢作りにはとんでもないエネルギーを要するだろう。今のうちに声を大にして言っておきたいことは、秋入学制を導入すれば教育のグローバル化の問題は片付くと思っているのであれば、それは大きな勘違いだということだ。とりあえず今年もまた「梅」の季節がやってくる■わずかずつではあるが円安傾向が見てとれるがいつまで続くのやら。これで少しは国内の輸出産業が持ち直し、日本の経済も回復の兆しを見せれば良いのだが……。多大な期待はしないでおこう。いつものように独り言。(照井)

Let me remind you . . .

★JAAC生の皆さん、保護者の皆さん、何でもお気軽にご相談ください

◆JAAC生の皆さんへ：履修科目のDrop and Add（教科履修の変更）の期間を再確認しましょう。今学期終了後に卒業する人や、今年、編入を計画している人は必要な単位を落とすことのないように心がけましょう。

▲留学ビザ（F-1）の再確認：今年5年間有効の留学ビザ（F-1）の有効期限が切れる方は、今年の夏休みに帰省して留学ビザの更新手続きを行う必要があります。各自の留学ビザの有効期限を再確認しておきましょう。

■就職活動をするJAAC生の皆さんへ：希望する企業のことをできるだけ調べて就職面接に臨みましょう。また、企業側に質問したいことも事前に整理しておきましょう。常に海外大学卒業生（見込み者）を対象としたジョブフェア等の情報には必ず目を通すように心がけましょう。

●JAAC本部内保護者様専用ご連絡・ご相談窓口：

フリーダイヤル 0120-525-626 [tokai@jaac.co.jp](mailto:tokai@jaac.co.jp) 担当：高瀬

JAAC 日米学術センター 鈴木：[t.suzuki@jaac.co.jp](mailto:t.suzuki@jaac.co.jp) ◎カリフォルニア担当：照井 [k-terui@mtg.biglobe.ne.jp](mailto:k-terui@mtg.biglobe.ne.jp)